



千 早



ふ る

苔田 カエル

「ちはやふる神代もきかず竜田川

からくれなゐに水くくるとは」

在原業平作

御隠居様や なに故情けなどかけなされた
捨て置いてくれたのなら
わちきは 漸く 楽になれたものを
また 苦しみの中で 生きねばなりんせん

とわやとわ その様なことは言うでない
とわやとわ 生きてこそそのものだよ

なに故 わちきは 生きねばなりんせん
それ程までして 生きねばなりんせん
あれ程までの恥をかかされ
世の全てが いい気味だと思ってありんしょう

とわやとわ その様なことは言うでない
とわやとわ 生きてこそ道も拓けよう

わちきは 決めんした

どうか 情けなどかけないでおくんなまし

どうか すっぱり放っというおくんなまし

もう決めたでありんすから

とわやとわ そんなこと言うもんじゃない

人の情けは 素直にきくものだよ

どこのどのたが 思ってくれるでありんしょうか

せめて 哀れと思ってくれるでありんしょか

人の嘲笑に晒される惨めさよ

人の善意に縋る惨めさよ

とわやとや そんなこと言うもんじゃない

人の情けは ただ縋ればいい

恨んで恨んで恨み切ってみせんしょう
そうすりゃ 飢えも忘れるでありんしょう
人から受けた恥も忘れるでありんしょう
恨んで恨んで わちきは悪霊になるでございんすよ

とわやとわ そんなことは言うでない
悪霊なんぞに なるもんじゃないよ

不運に生れ落ちたこなたの身を
誰のせいにもできんせんこなたの身を
ならば 一層 あの男を憎むんでありんす
憎んで憎んで 見事に憎み切っであげんしょう

とわやとわ そんなことは言わないでおくれ
悪霊なんぞになってみよ もっと辛いことよ

恨んで恨んで恨み尽くせば
辛い飢えも耐えらるでありんしょう
冷たい目にも耐えられるでありんしょう
人の善意も 期待せずにいられるでありんしょう

とわやとわ そんなことは考えるもんじゃない
どうか一口でも たべておくれ

売られたのは わちきのせいでありんしょうか
人とは一体なんでありんしょうね
わちきは 一体 何なんでありんしょうか
たった一度 思い上がったとて 何が悪いことありんしょうか

とわやとわ そんなことは考えるんじゃないよ
食べれば 心も落ちつくってもんだ

御隠居様が いくら世話をしてくだすって
わちきが まつとに生きよと頑張ったとて
ちょっとした暇の隙を狙って
人は 言いたいことを言いやがる

とわやとわ そんなことは気にするんじゃないよ
人は 何だって言うもんさね

例えば 玄関先の掃除の合間に
誰とて 四季折々の佇まいにみとれんしょう
だけど わちきがそんな隙でも見せてご覧ないんさ
旦那衆をあさってありんすとか 色目を使ってありんすとか

とわやとわ そんなことは気にするんじゃないよ
人は 好き勝手言うもんさね

でありんすから どうか放っといてくんなまし
一口食べたからって 寿命が一瞬 延びるだけ
その分 辛さが増すだけで
そして また 飢えに苦しまなきゃなんない

とわやとわ もうよいもうよい
だったら ここにいたらいい

この世に あっちの居場所なんて
一体全体 どこにあるんでありんしょうか
生れたことこそ 間違いじゃないかと
そう思えて なりんせんでありんすよ

とわやとわ もうよいもうよい
気が済むまで ここにおったらいい

そう言ったきり とわは逝ってしまった
それから暫くしてのことさあね
痩せ衰えた女の土左衛門が上がったのは
豆腐屋の前をながれる川の下流でだ

何と業の深い女よ
自業自得ってもんですあ

果たして どうかな
骨と皮だけになっちまって
その顔てったら 見られたもんじゃないよ
まったく 般若の面みてえでな

全く業の深い女よ
どこまでも根性の腐った女ですあ

さ～ どうしてかな～

何で二度までして 水を潜らなあならんのだろう

折角 助けた命をだな

どんな思いで 身を投げたんだろうと思うとな

やだな～ ご隠居

あんな女 もうどうだっていいでしょう

さ～ どんなもんかな～

そう言うお前さんは どうなんだい

大関までなって 有頂天になってやしなかったかい

お大尽さまにでもなった気ではなかったのかね

やだな～ ご隠居

昔のこった もうどうだっていいでしょう

それが どうでもよくねえんだな
どうにもこうにも よくねえんだな
こう 古傷がざくざくとしてな
あたしの良心が咎めて仕方がないんだよ

あんな女 どうなったっていいでしょ
生まれつきの性悪だ

それは どうも違うよ
あたしわね 娘を売ったことがあってね
友人の娘さあね 可愛い娘さあね
あたしにも 小さい頃からなついててね

あんな女 関わりのねえこった
何処の誰かなって 知ったこったね

友人が 悪い奴に騙されっちまってな
病がちなかかあと 幼い娘を残して
自分だけ 首をくくっちまってな
ひでえ話だろう

仕方ないさ ご隠居
何処にでもある話ですあ

そんな時 おゆみ坊が言ったんだ
おいちゃん あたいを高く売ってって
おっかさんの薬代をつくんなきゃないからってさ
ひでえ話だろう

仕方ないさ ご隠居
よくある話ですあ

ああ 仕方ないさ

そう思って忘れようとしたがね

どうにも あん時のおゆみ坊の顔が忘れらねんだな

何とかなったんじゃないかってな

どうにもならね～さ

そんな娘は 五万といら～ね

直ぐに おっかさんはおっちゃんじゃまってよ

何の病気か知らねえが 気を病んだんだな

自分から逝っちまっ様なもんだ

無理もねえな 自分の為に娘が身を売ったんだ

どうにもならね～さ

そんな娘は おゆみ坊だけじゃねでしょに

おいちゃん おいちゃんってだなあ
無垢な頃の顔が どうにも痛くって
その友人と 将来 家の倅の嫁になって
じゃれごと言っておきながらだ

悪いのは ご隠居じゃねえ
ご隠居一人 心病むこたねえ

おゆみ坊一人 何とかなったんじゃないかって
あのおっかさんさえいなければって
いいや いたとしてもだ
何とかしてやれたんじゃないかってね

そりゃ その友人がいけね
いや その詐欺野郎がいけねんだ

とわが どんな境遇か知らねえよ
だけどね どうにもこうにも
おゆみ坊との境遇が重なってね
どうにも こうにも いけないんだな

あの女は 特別ですあ
ご隠居が 心痛めるこったね

誰にだって 無垢な頃はあるもんさ
お前さんだってそうだろう
どうして とわだけ違うと言えるんだい
お前っとこのさな坊のこと 考えてご覧よ

あっしは そんなことはしね
家族泣かすようなこた 絶対しね

お前さんだってそうじゃないのかい
豆腐屋の子倅が 大関までなってだ
途端 気まで大きくなってよ
御大名にでもなった気でいったらうよ

やめてくださいよ 昔の話だ
それこそ 胸が痛むってもんでさ

今度はお大尽達と張り合って
太夫一人 どうとでもなると思ったんじゃないのかい
太夫にだって意地はあらな
お前さん 見透かされていたんじゃないのかい

やめてくださいよ 昔の話は
それこそ 身も蓋もね

そうさね 昔の話はもうやめだ
とんだ赤っ恥をかかされたもんだね
たかだか太夫に振られたくらいで
尾っぽ巻いて逃げて帰って来たんだからな

止めて下さいよ まったく
ちえ あの女にさえ会わなかったら

そうさな 邪心なんかもたないで
一心不乱に稽古でもしてたらな
千早太夫とて 妙な誇りなんぞうっちゃらかせば
乞食なんぞに身を落すこともなかったろうよ

止めて下さいよ ほんと
あんな女と一緒にしねえで下さいな

どうだろう あたしに免じて許してやっちゃ
思い起してご覧よ 綺麗だったな
弁天様みたいで
極楽浄土の夢物語さね あたしには

へえ 確かに綺麗でしたよ
見かけに すっかり騙されっちまって

もう 許しておやんないさいよ
あの娘は 本来は心根の優しい娘だよ
あの門を潜ると 全くの別天地さね
あたしらの常識は 通じないってもんだよ

へえ えっ へえ～
なんだか 分かったような分からね～ような

とわがあたしに 最後にこう言ったんだ
わちきは 悪霊になりんしたとて
あの男は 尽きることはないでありんしょう
身体は鋼の様に 頭は空っぽでありんしょうから

どこまでも 小賢しい女よ
死ぬ間際まで あっしをこけにして

それが違うんだよ よくお聞き
祟りは 弱い者へと流れてしまう
だから わちきを払っておくんなましときた
つまりは 子供に障りがあったらいけねってんだ

そりゃ 困りますよご隠居
死んでも尚 がきまで足気にしよって

だから 許しておやんなさいよ
あの娘は 本当は気が良いのだから
心のやり場が ないだけなのさ
たった一人で生きて来て

そうさね にぎり飯の一つでも
供えておあげなさいな

あの娘は 本当 健気な娘だよ
こんな枯れ果てたあたしにまで 気使ってだ
ご隠居様に変な噂がたったらいけないからって
え～ 男冥利に尽きるってもんじゃないか

そうさね 浄土でまた拝みたいもんだね
だから 成仏してほしいんだよ

元関取竜田川と言われた豆腐屋は
嘗て 自分を振った
元花魁の千早太夫と言われた女を
どうしても 許すことはできなかった

死んでも尚 自分にどころか
可愛い子供にまで崇ろうなんて
そんな勝手なことはあるわけないと
益々 許せなかった

しかし どうだろ しばらくしてのこと
一番下の末娘が 大熱を出した
幾ら経っても 熱は下がらず
食べ物は元より 薬も水さえも喉を通らず

すっかり 骨と皮だけになってしまった
これには 流石に 男もあためふためいた
いよいよと言う時に ふっと気が付いた
何気に 店の前を流れる川面見つめているうちに

男は 慌てて 飯を炊かせ
一番上等な茶碗に
こんもりと飯を盛り
川の畔で 一心不乱に祈った

そしたら どうだろう
峠と言われたその山を
何とか越えることができ
娘は命を取り留めた

それからも 男は 飯を盛り
川の辺に 飯を供えた
毎日絶やさず供えた
すると 娘の病気はすっ飛んでった

それから 男はようやく改心して
千早太夫の御霊を鎮めるべく塔を建て
飯を供えて 吊った
お蔭で 子供は元気に店まで繁盛した

それが この塔のいわれである
だけど いいかい
ここにお供えするのは飯にしな
おからは くれぐれも供えるんじゃないよ

一度 おからを供えたことがあってね
何代目かに どけちな嫁が嫁いできてさあ
飯を盛るのはもったいない
店の余りもんのおからで充分で言ってだ

そしたら どうだい
途端 真っ青だった空が
もこもこうっと 黒い雲に覆われて
ざざあっと耐えきれないほど雨が落ちて来た

あっという間に川は溢れて多くの人々が流された
勿論 豆腐屋の俵も流された
だからいいかい おからは供えちゃいけないよ
そうさなあ 人の傷に触るなってこったな

おしめ～

参 考：古典落語 千早振る

落語検索エンジン 文章変換ソフト「浦里」使用

千早ふる

(2016.05.03)

<http://p.booklog.jp/book/106081>

著者：苔田 カエル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/keronojyou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106081>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106081>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ